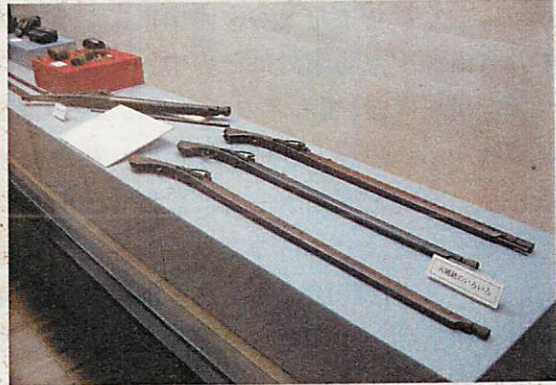


博物館だより No.62

2009.8 津山郷土博物館



エンフィールド銃



火縄銃



玉入れと胸乱



鉄砲筒



火薬入れ

小企画展「火縄銃」を開催中

戦国時代末期の火縄銃の伝来は、日本の戦闘の有様を大きく変えたばかりでなく、刀鍛冶を中心とする職人たちにとっては、西洋の最新技術の導入とそれに対する対応という新たな経験の意味していました。そして、国産化に成功した火縄銃は、たちどころに全国に広まってきました。

津山に遺された様々な火縄銃や関連の道具から、優秀な職人たちや、火縄銃を所持していた武士たちへの思いが広がり、日本が歩んできた道への興味も深まります。

また、幕末に導入されたエンフィールド銃からは、長い鎖国を経ての国際社会との関わりや近代化の動きが見えてきます。9月3日(木)まで開催。(尾島)

くほら なみ こ 久原濤子のブロンズ像をめぐる

久原濤子（1906～1994）は津山市二階町出身の彫刻家です。23歳でひとり上京し、当時の日本彫刻会で勢いのあった一人、北村西望（のちに日展会長・文化勲章受章者となる）^{きたむらせいぼう}に入門します。そして帝国美術院美術展覧会（帝展）に初出品した作品が女性としては初めて入賞。以後、文部省美術展覧会（文展）、日本美術院展（日展）などに数々の作品を発表していきます。また、北村西望が制作した「長崎平和祈念像」には助手の一人として参加するなど、まさに女性彫刻家のさきがけといえる人です。平成6年に亡くなりましたが、津山市にご遺族から作品33点が寄贈されています。

昨年、津山郷土博物館ではその中から、ブロンズ像2点（「女の首」・「裸婦」）を展示しました。どちらも少し横を向き、観る者の心もちによって表情が違って見えるような、そんな女性の像でした（博物館だよりNo.58参照）。さらに今年は、社会福祉法人江原恵明会より新たに2点のブロンズ像が寄贈されました。前庭と玄関ホールに設置し公開しています。実は久原作品はこの他にも市内のあちこちにあります。今回はそれらのブロンズ像を改めて訪ねてみました。

最初は津山郷土博物館です。まず前庭で来館者を静かに迎えるのが「男の首」です。これは久原濤子が帝展に初出品・初入選した作品です。そして玄関ホールに入ると等身大の「フルートを吹く」の像が美しい姿を現します。

次に郷土博物館から西に進むと山下の児童公園には「わんてえか」の像があります。「わんてえか」とは旧津山町あたりの方言で「ジャンケン」のことだそうです。「わんてえかのホイ」とジャンケンをする子供たちのほほえましい様子は訪れる人の心をなごませます。

また山北の中央公園には「星座」があります。夜空を見上げ星を指さす二人の少年の像は中央公園グラウンドの入口付近にあります。

そして、西新町に来春開館する新津山洋学資料館には「箕作阮甫先生」^{みつくりげんぼ}と「宇田川玄随先生」^{うだ がげんずい}の胸像があります。この2つの像は洋学資料館の建設にあわせて、「箕作阮甫先生」は津山文化センターから、「宇田川玄随先生」は郷土博物館からこのほど移されたものです。偉大な洋学者2人は「自分のいるべき場所はここ。」とばかりに存在感を放っています。また入口近くの壁面に「津山洋学五峰」と題された宇田川家・箕作家の高名な5人の洋学者のレリーフも旧館から移され来館者を出迎えます。

以上、久原濤子の作品を訪ねた今回でしたが、ふだんは車で通り過ぎるだけの場所でも、時には歩いてみてはいかがでしょうか。すてきな作品に出会ったり、おもしろい発見があるかもしれません。

（加田誓子）



男の首（津山郷土博物館）



フルートを吹く（津山郷土博物館）



箕作玄甫先生
(津山洋学資料館)



宇田川玄随先生(津山洋学資料館)

上から時計回りに

うだ がげんすい げんしん とうあん
 宇田川玄随、宇田川玄真、宇田川榕庵、
 みつくりしゅうへい げんぽ
 箕作秋坪、箕作阮甫



星座(山地・中央公園)



津山洋学五峰(津山洋学資料館)



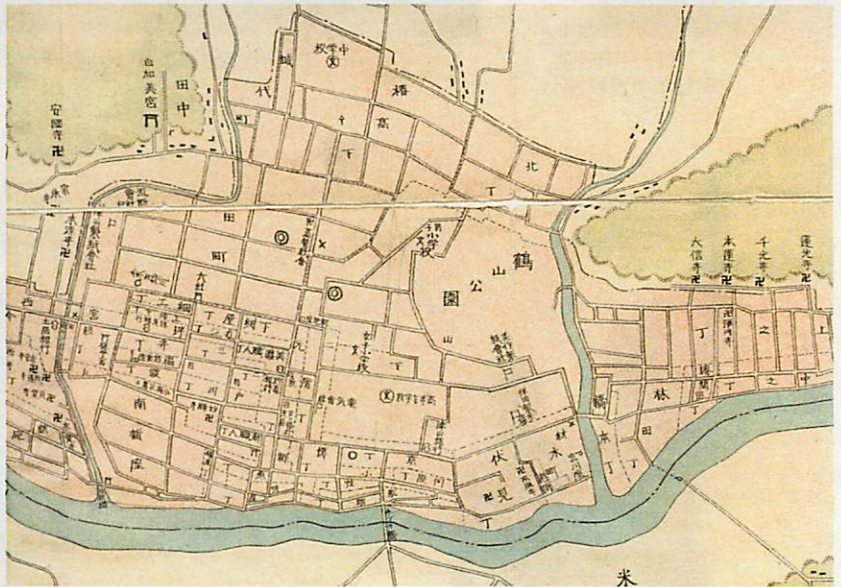
わんてえか(山下・児童公園)

津山と進駐軍

平成21年5月のある日、日上 茂之（ひかみ しげゆき）さんより電話で進駐軍に関する問い合わせがあり、話を聞いているうちに日上さんが、終戦後津山に入ってきた進駐軍の通訳として働いていたことが判りました。そこで、後日改めてお話を伺いに行くことになり、日上さんのご自宅を訪問して聞き取り調査を行いました。その一部をご紹介します。



今回お話を伺った日上茂之さん



大正2年の津山町中心部の地図

昭和20年当時の津山市中心部と大きくは変化していないと思われる。

日上さんのお話

終戦当時、私は津山の動員署で働いていました。当時、動員署は津山市役所の東、中国電力津山営業所との間にあって、近辺の女性を「赤紙」ではなく「白紙（^{あかがみ}4×2cm程度の縦長）^{しろがみ}）」で徴用して、水島・岡山・姫路の軍需工場などに送っていました。動員署では生まれたばかりの赤ちゃんを抱えたような女性はこっそりと大目に見て帰したりしていましたが、未婚で、田んぼの手伝いをしていたよ

うな女性は徴用されました。

津山に入った進駐軍（昭和20年10月15日に来津）は田町の税務署を宿舎にしていました。建物全体を使って、1階にはベッドを並べて、若い兵士が寝ていました。2階は、あまり近づかないようにしていましたからよくわかりませんが、年嵩の兵士（2～3人）の部屋と事務室があったように思います。進駐軍は最初8人くらい津山に来て、一番多いときで14～15人ぐらいいました。津山に来た進駐軍は岡山から出張しているのではなく、そこに寝泊りしてしま



旧市役所（現津山郷土博物館）から東を見る。
駐車場の東側が動員署のあったところと思われる。

た。津山近辺の日本軍の隠匿物資を案内したのは、在郷軍人で、結構年上の人でした。私が進駐軍の通訳として最初にした仕事は中山神社奥の山中にあった隠匿場所でした。それほど奥には入りませんでした。そこには、軍服や毛布が大量に隠されており、憲兵の使っていた拳銃もあったことを記憶しています。毛布や軍服なんかが出てきても進駐軍は手をつけられませんが、拳銃だけは進駐軍が引き上げました。

その翌日、神目橋（久米南町中神目）近辺の山の中に入っていきましたら、大砲の弾がたくさん出てきました。ジープで運んだのですが、1回20発位積んで、6回ほど往復しましたので、100発以上有ったと思います。弾を運んでどうするのかなと思っていたら、それを神目橋の河原に積んで、進駐軍が分解していました。信管を抜いてから、火薬を河原に出し、付近から避難させて爆破しました。ものすごい音が生じて、近隣の部落の人たちが皆飛び出てきたくらいでした。私が近所の人たちに「軍隊が来たことがあるか」訊いてみたのですが、皆知らないという返事でしたので、夜中に来て隠していったんじゃないでしょうか。これもやっぱり在郷軍人が案内していききました。弾薬なんかは山の中に穴を掘って埋め込んで有りました。まるで防空壕のようで、「こんなところに防空壕なんてあったか」などといって掘っていると奥に大砲の弾なんか有りました。

進駐軍は外に出て行くのを怖がっていました。日本人は怖い、いつ槍でつかれるかわからないといってあまり出歩きませんでした。実は私も「日本人には竹槍があるから気をつけろよ」といって脅しておいたのですが、それもあって仕事現場と宿舎の往復だけでした。「いっしょに街に出ようか」と誘ったことも有りました。現在の郵便局の裏あたり（津山市二階町周辺）にダンスホールがあって、一度連れて行ったこともあります。食事なんかも、食事を作る兵隊が2人位いて、自分たちで作っていて、極力外に出ないようにしていました。宿舎に訪ねていくとコーヒーを出されたことが有ります。サツマイモを蒸かして持って行くと「ありがとう、ありがとう」とすごく感謝されて、握手を求められたことも有りました。

（担当 乾 康二）



現在の神目橋(久米南町中神目) 手前の河原で弾薬を爆発させたという。

津山市上之町・出隆、神伝流、平沼のよっさん、その他

館長 佐野綱由

私が薄汚い高校生の頃（昭和41～2年）、倉敷市に住んでいて、ある日友人と二人町に出て「野上書店」という本屋に立ち寄り（いまはない）、本を物色していたら、新潮文庫「哲学以前」という本が目についた（新潮文庫版はいまは絶版）。ぱらぱらとめくってみたら面白そうなので、買った。「出隆」という著者は知らなかったが、名前もなんとなく変わっていて気に入った。一緒にいた友人に見せると、「こんなつまらん本やこう読むな」といって道端に捨てたので、あわてて拾って家に持って帰って読んだ。

文章は、こねくり回したような文章で、読みやすくはなかったが、その浮世離れた著者の性格はよく伝わり、好ましく思った。これが私と出隆の出会いである。

その後、縁あって津山市役所に勤めることになり、出隆が津山の出身であることを知ったが、市役所の同僚も先輩も、誰もその名前を知らなかった。新潮文庫に収録されるような本の著者なら、出身地の人が知らないわけではないと思っていたので、不思議な気がした。

前置きが長くなってしまったが、近年インターネットなるものが流行り、書籍に関してはかなり昔のものも手に入りやすくなった。そこで、津山関係の本を集めてみようと思い立って、いくつか注文した中に空点房の「空点房雑記」八雲書店昭和23年2月25日再刊というのがある。今回はそれを紹介したい。

「私は、神伝流游泳術中興の祖翼龍上原先生の孫弟子、幼にして（といっても実は17歳の夏）当流の免許皆伝を得たものである。そして、私がこの神伝流の極意に達している者なるは疑うべからざる事実である」という書き出しで始まる「水泳漫談」は、ソクラテスのように（本人のつもりでは）、また一面、ほら吹き男爵のように（一般人には）、一見理路整然と書いてあり、またその周辺の文章にはいくつか津山のことが書いてあって、面白くてためになるのでお勧めである。

水泳の達人を以って任ずる津山のソクラテス（れっきとした東大のギリシア哲学の教授である）は言う。「…例年の通り今夏も高野山に引籠もったが、この山にも伯林（ベルリン）からの放送に夜更かしする水上日本の熱心な応援

者が多かった。この連中に以前から私は水泳の自慢をしているので、遂にこの夏はお手並み拝見と山から引き卸され、麓の橋本、あの前畑嬢を生んだ紀の川に泳ぎに行かされた。それが病み付きで更に二三回行った。私は久しぶりに泳いで、自分ながら益々泳ぎの極意を体得して来たと思えざるを得なかった。連中は私の得意の手足揃や諸手抜や枯木流し（浮身）を見て感嘆したらしいが、私が自分でうまいと感じたのは私一流の「直立不動」であった…直立の姿勢をとると一度は水に沈むが、やがて鼻の辺まで浮き上がって来る。このとき氣息を適宜に吸うと体は停止する。その間約5秒位であろう。それからそのまま静かに流されてゆく。その気持ちはなんとも言えない。体の何処ももうごかさず何処にも力を入れず頸が水の上に真直ぐに置かれたまま静かに流されているのである。呼吸を荒立てない程度になら陸上の友と語ることも出来る…（1936.10.30）」（ベルリンオリンピックで、日本の前畑が、女子平泳ぎで日本女子初の金メダルをとったときの文章）

出は、津山生まれの津山育ちなので、この技は吉井川（津山川）で覚えたものである。当時は、吉井川もヒトが立ったまま流されるほどの水深と水量があったのであろう。ただ「…私の神伝流は、人工的のプールでは困る。…例えば、草（そう）の泳ぎ方などは…流れのないプールでやらされては、ただ藻掻いているみたいで何の事かわかるまい…」

以上が「水泳漫談」であるが、水泳に関する文章は評判がよく（もちろん哲学の文章よりも）、本人も気をよくして、続けて何篇か書いている。

ちなみに、空点房というのは高野山にある宿坊で、出は毎年夏になると、頼まれて高野山大学で西洋哲学の集中講義をしており、その宿にしていた。

「空点房雑記」からもうひとつ。

「亡父のゐのこ友だち」という文章がある。これは、津山市南新座出身の平沼淑郎（1918年～21年、早稲田大学学長）と、出隆の上之町の実父、渡部惟明と養父、出道直との思い出を書いたものだ。父ふたりは共に平沼淑郎の友人だったのである。

津山市民ならわかるであろうが、平沼家は南新座、渡部家は上之町で、同じ武家屋敷でも西と東の端っこ、歩いて30分もかかる距離の子どもが、竹馬の友であったというのがわからない、と出隆は書いている。ずっと気になっていたまま答えを聞く前に3人とも亡くなってしまった。

1930年に出は東大助教授のかたわら、早稲田大学の講師になり、ときどき津山の実家の用向きで商学部の平沼研究室を訪れたり、自宅を訪れたりしていたが、同郷だからといって特別の知遇を受けようという考えはなかった。

実父の渡部惟明は、平沼先生を平沼の淑(よ)っさんと呼んで漢詩の友としていたし、養父の出道直は先生と同年で「ゐのこ友だち」だそうである。

実父、鷲洲・渡部惟明の古希の賀に平沼淑郎から漢詩が1篇贈られている。漢字が難しいので掲載は省略する。

死の前年、病を押して上京した養父は、ただ平沼さんにだけはお会いしたいと言って病状と天候との好適な日を選んで先生のお宅を伺った。自分は都合が悪く、家内が伴をして行ったが、歓待を受けたとみえて、帰ってから非常に喜んでいて。父は津山の医者から菜食の粗食をすすめられていたが、同じく心臓の弱い平沼先生があべこべに「何でもうまいものを食うがええ、わしは刺身でも何でも食う」と言われたそうで、わが意を得たように喜んで、いつもこのことを言っていた。帰りに先生は玄関まで送って出られて、「同年のゐのこ友だちじゃ、お互いに気をつけて長生きをしましょうで」といわれたという。それから3ヶ月後に父は亡くなった。

「田舎の故郷に埋もれた古い昔の友の末にまでも一々これほど親しく丁寧にされる先生を、実に大きいと私は思うのである」と書いている。

この「亡父のゐのこ友だち」の文章はどういうわけか「出隆著作集」に採録されていない。津山人としてはまことに残念である。

*

出は、第六高等学校時代、岡山の内田百間の実家に下宿していて、おばあさんの嫌がる「縁起でもない」ことばかりして、喜んでいて。こんないたずら小僧の面もある。

また、六高から東京帝大に入って間もない頃、団子坂のそば屋か何かで六高の短歌をしていた連中が集まって、石井直三郎の師事していた尾上柴舟先生を中心に同人雑誌を出そうという話

があり、出が以前下宿していた岡山のはずれの「甕井」(みかい)の地名の「甕」を提案したところ、皆の気に入り、清楚な感じを出すために「水」をつけて「水甕」とした。

もう一つ。出隆の著作は今日ほとんど読まれていない。いまでも岩波文庫版のアリストテレス「形而上学」は出隆訳となっている。しかし、これを買って読んだという人を私はいまだ一人も知らない。彼は、ギリシア哲学が専門のように思われているが、大学の卒論はスピノザである。浮世離れした性格は、ソクラテスよりもスピノザに近いかもしれない。これは、同じ津山市上之町出身の蘭学者、津田真道にも共通のものを感ずる。顔つきもなんとなく似ている。

また、共産党に入党したのは、同じ津山市勝間田町出身の荻田アサノと共通するし、突然東大教授を辞して東京都知事選に立候補したりしたのは、やはりいたずら小僧のきまぐれなのかもしれない。世間的には確かに一風変わっている。

ある年の東大の学長が卒業式の訓示で言った「太った豚」と「やせたソクラテス」の話の、やせた方のモデルは間違いなく出隆であったと私は確信している。実際のソクラテスは、やせてはいなかったと思うが。



大学教授時代の出隆



市制80周年記念「江戸一目図屏風」制作200年

特別企画 「江戸一目図屏風」 本物・複製 同時公開

津山郷土博物館では所蔵する「江戸一目図屏風」のレプリカを作製しました。そこで、完成記念として江戸一目図屏風の本物と複製を同時に展示いたします。あわせて同じく鋏形蕙斎が江戸時代の津山を描いた「津山景観図屏風」一雙も展示いたします。皆さんお誘い合わせの上、ぜひご覧ください。

●期間：平成21年9月5日(土)～10月7日(水) ●場所：津山市山下92 津山郷土博物館 三階展示室

5分でわかる 津山の歴史①

津山 = 海!?

「むかしむかし、津山は海でした。」

こういうと「えっ!」といわれる方も居られるかも知れません。そんなこと考えたこともなかったという人もいるでしょう。でも、本当のことです。

「むかしむかし」といっても今から1500万年前のことです。アウストラロピテクスが地球に現れたのが540万年前ですので、人類の出現するずっと以前のことでした。

当時、中国地方の大半は第一瀬戸内海と呼ばれる海で、亜熱帯の温暖な気候であったことがわかっています。実際に津山とその周辺からは、海に住んでいた生き物の化石がたくさん見つかっています。(つづく)



津山市院庄から出土したカキの化石

博物館入館案内

- 開館時間：午前9：00～午後5：00
- 休館日：毎週月曜日・祝日の翌日
12月27日～1月4日・その他
- 入館料：一般 210円(160円)
高校・大学生 150円(120円)
中学生以下 無料

※()は30人以上の団体

◆ 博物館だより No.62 平成21年8月1日

編集・発行：津山郷土博物館
〒708-0022 岡山県津山市山下92
☎(0868)22-4567 FAX(0868)23-9874

E-mail:tsu-haku@tvtnet.ne.jp

印刷：有限会社 二葉